みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.73

ひと言　大きなウソ

千葉　建夫（センター運営委員）

「（年金の記録漏れは）国が責任を持って最後の一人まですべてチェックします」「私が安全を保証します。状況はコントロールされ」「汚染水は……完全にブロックされています」。いずれも安倍首相の発言です。明らかにウソとわかる言葉を堂々と語っています。

12月6日、安倍政権は平成の治安維持法とも言われる特定秘密保護法を、国会で力づくで成立させました。直後の記者会見で、首相は「秘密の範囲が広がることはありません。そして一般の方が巻き込まれることも決してありません」と発言しました。「国民大衆の心は……小さな嘘よりも大きな嘘の犠牲となりやすい」とは、「わが闘争」（平野一郎・将積茂訳・角川書店）のヒトラーの言葉です。言い換えるなら、「大きなウソほど騙しやすい」ということ、そういえば、「ナチスの手口に学んだら」と助言した閣僚がいました。批判をうけ発言を撤回しましたが、安倍政権は現行憲法「改正」に向けてその本音を捨てないでしょう。

憲法学者の奥平康弘さんは、1952年に成立した破壊活動防止法について、「規制は一度も適用されていません」と紹介しています（朝日12／11）。いったん成立した法律も世論の力で適用を止め廃止できるのが、今の社会です。平和や民主主義を失って後悔しないよう、今を生きる主権者の一人として声をあげ続けていく決意です。

目次

ひと言　千葉　建夫　1

特集　被災地での子ども支援から見えること
子どもたちの心に寄り添い続けて　神林　俊一　2
子どもたちが笑顔で来てくれる場にしたい　熱海龍太郎　4
被災地仙台と子どもの貧困　渡辺　寛人　7

冬休み・BOOK レビュー
幼児期に楽しい絵本との出会いを　酒井　文子　10
小学生にも絵本の素敵な世界を　杉田　良子　11
自己を育てる　石川理恵子　12

報告 フォーラム「子どもの今と未来を考える」
PART Ⅴ「子どもと読書」の今、これから　須藤　道子　13

3･11　2年半後の今考えること
被災保育所支援の取り組みから思う　小幡　幸拓　16
つらかったら、また来ていいからね　廣野　清子　17

わたしの出会った先生 5
体育教師への（全てではないが一つの）契機　久保　健　19

教室の報告
1日1歩　3日で3歩　3歩すすんで2歩さがる　芳賀　郁雄　20

報告ー第2回 戦後教育実践書を読む会
『川口港から外港へ』を読む（鈴木正気 著）　かすがたつお　22

本の紹介「学力・教育・学校を問い続けて」　24
センターの動き　24

題字：江島隆二　表紙写真：神林俊一

特集
被災地での子ども支援から見えること

震災後、子どもに関わるおとなは学校関係者だけではない。さまざまな団体や個人が、被災地で子どもたちの支援活動に取り組んできている。今号では、子どもたちの支援に取り組む3つの団体（子どもの遊び場をつくり運営している「気仙沼あそびーばーの会」、子どもたちの学習支援をしている「亘理いちごっこ」と「仙台ＰＯＳＳＥ」）にそれぞれの取り組みを通じて感じていること、見えてきたことを執筆いただいた。子どもたちの現状と課題を多面的に考えたい。

「気仙沼あそびーばー」のとりくみから
子どもたちの心に寄り添い続けて

神林　俊一

「ここができるまで、どれだけ暇だったかわかるか!?」

この言葉は、震災から1ヶ月後、当時小学5年生だった男の子が言った。気仙沼に子どもの遊び場を作って間もないころだ。

この日、いつものように子どもが山の上から下からとやってきた。遊び場を作りだしてすぐのころ、この地域の子どもたちは60人～80人が毎日来ていた。一日一日が、とても短いぐらい全力で遊んでいた。冒頭のテーマはそのころに子どもが言った言葉だ。

僕は、東京にあるＮＰＯ法人日本冒険遊び場づくり協会のスタッフとして、震災後の4月3日に気仙沼を訪れた。遊び場を作り出す初期メンバーとして、２０１３年12月現在まで気仙沼の遊び場に身を置き続け、子どもや地域の中に寄り添って活動している。

遊び場をオープンして初めの数日はとにかく、どんな心境の子どもが来るか未知数なので、その時、その瞬間に関わっている子どもと向き合うので精一杯だった。

一週間も過ぎたあたりだ。顔と名前、性格もだんだんと分かってくるころに、子ども同士のケンカが目立って増えてきたのだ。しかも一つのグループで喧嘩が起きると、誘発するように他のグループやまったく関係のない子ども同士でも喧嘩が起きる。

これは、これまで自分の関わったことのある遊び場では感じたことのない少し異様なものとも思った。内容はおまえの肩が当たっただの、こっちの場所はもう遊んでるから他のところにいけだの、特に多かったのがプレーリーダー（遊び場に常時いるスタッフ）の奪い合いだ。

僕が男の子と一緒に遊んでいると、遠くから「こっちに来てよー」と呼ぶ声がする。「こっち終わったら行くよー」と彼女に伝えるが、「今すぐ来てー!」と言ってくる。「早めに行くよー!」と伝えるが彼女の呼ぶ声は止まらない。彼女の言葉の節々からは、気持ちの余裕がないと感じられるのだが、それは彼女だけではない。まさに、今、目の前にいる男の子も「まだ、いてよ」「向こうには、行かないで!」と必死だ。

こうしたことがきっかけで、子ども同士で喧嘩が起きることは少なくなかった。だが、初めはこれは震災があったことによる心の変化から来ているのか、この地域特有のものなのか分からなかった。

こういった状況が夏まで続き、次第に子どもの様子は落ち着いてきた。

「ねぇ、かんぺー、新しいパパ、逆上がりができるんだよ……」

２０１１年の夏。

あそびーばーがオープンしてすぐのころから、いつも二人一緒に遊びに来ていた仲の良い兄弟が、お弁当を持って遊びにきていた。

お兄ちゃんは、よくあそびーばーでトンカチ片手に廃材を使い、何かを作って過ごしていて、妹はごっこ遊びをしたり、流行りのシール交換をして過ごしていた。この日は、お兄ちゃんと一緒にチャンバラ遊びで使う木の剣を作っていたら、お兄ちゃんは「俺のお父ちゃんは、すげーんだぞー!!」と言い、トンテンカンテンと不器用だけども、一生懸命トンカチで釘を打ちながら僕に話してくれた。僕は、「父ちゃんは、すげーんだー」と応えると「お父ちゃんは大工さんだからなー、すげーだろ!」と話し、またトンカチを打ちながら、「お父ちゃんは雲の上だからなー、おれが頑張ってるの見てくれてっと思うんだ」と言った。

僕はこの時、この子のそばにいられて良かったと心の底から思った。震災から半年が経過して、こんなふうに話せるようになって良かった。遊ぶことで子どもの心は穏やかになるのだ。

それから1年が過ぎた２０１２年の冬。今度はこの兄弟の妹からこんな言葉を言われた。

「引っ越しちゃったら、かんぺー、どうする?」

どうやら数ヶ月後に家が引っ越すこととなり、転校するかもしれないと言うのだ。それからちょくちょく遊びに来るたびに「かんぺー、あたし引っ越すかもよ??」、「引っ越したら（遊び場に）来れないからつまんないなー」、「もうみんな友達じゃなくなっちゃうのかなー」と不安な気持ちを僕に話してくれた。

そして２０１３年の春、この兄弟は引っ越しを済ませたと兄弟と仲の良かった子ども達から聞いた。

２０１３年の夏、久しぶりにこの妹が遊び場に来た。この日は妹と仲の良い友達が多かった。しばらく様子を見ていると、妹は一人ぼっちで遊び場の中をぶらぶらして過ごしていた。

僕は気になったので、声をかけやすい場所で見守っていると、妹はスッと後ろに寄ってきた。「みんなで遊ばないのー?」と声をかけると、「みんな友達じゃないもん……」と言い、僕の後ろでまたぶらぶらしていた。僕は「そうなんだー」と返答した後、彼女に対してどう声をかけるか考えた。転校してから時間が経ち、久しぶりに来た遊び場で、友達のことを友達じゃないと言う彼女は、何を思ってそう言ったのだろう。そうして考えていると、彼女が続いてこう言った。

「かんぺー、逆上がりできる?」

僕は「苦手で逆上がりできないんだー」と答えた。

すると彼女が、

「ねぇ、かんぺー、新しいパパね、逆上がりができるんだよ……、すごいよねー……」

と話し始めたが、その声のトーンは暗い。

「前のパパは逆上がりができなかったんだー、でも、今度のパパはできるんだー」

すごいでしょ！　という喜びを話したい気持ちと同時に、その状況を受け止めようと葛藤してるように思えた。この後スッキリしたのか、急に僕の元を離れ、友達の輪に混ざっていった。

なぜ、遊ぶことが大事なのか？

震災により家や家族を失った子だけでなく、転居・転校などで仲の良かった友達と離れたり、生活が一変した子がたくさんいる。

震災後のストレスによる離婚が多いとも聞く。

この妹は、この3年間の度重なる変化にどういう思いでいたのだろう。だが、変化に振り回される子どもはこの妹だけではなく、遊び場に来る子どもそれぞれが事情を抱えているのだ。その時を今も、思い出すのだが、未だに妹がどういう心境だったかは分からない。遊び場で出る子どもの言葉には、どういう心境で言ったか分からない時もある。だけども、それで良いと思う。子どもにとって「遊ぶ」ということは、どれだけ不安の波で気持ちが揺られようとも、自らの力で乗り越えていこうとする気持ちの表現だと思っている。

僕がやっていることは、子どもがどんな心の状態だろうと、いつだってその子の心に寄り添い続けることだ。辛いことがあって誰かに会いたくなったり、喜びを共有したい時、なんとなく遊びにいってみたり、ちょっと疲れた時に愚痴をこぼしたりと、子どもがどんな気持ちだろうといつでも自由に来れる遊び場を作っている。

子どもに必要なのは、「食べる、寝る、遊ぶ」。食べることと寝ることをやめると体が死んでしまう。そして遊ぶことをやめれば、魂が死んでしまうのだ。

僕は被災地での遊び場で出会った子どもを通じて、このことを少しづつ実感してきている。

（気仙沼あそびーばーの会　プレーリーダー）

「亘理いちごっこ」のとりくみから

子どもたちが笑顔で来てくれる場にしたい

熱海　龍太郎

寺子屋事業の立ち上げ

亘理いちごっこが、環境の整わない児童・生徒に、とにかく学習のためのスペースとその機会を作らなければならないと学習支援事業を開始したのは、２０１１年5月のことだった。当時は、遮音性もなく、家族の生活が行われている場に学習スペースを確保することは難しく、勉学に専念することができない児童生徒がほとんどだった。それではと当法人の活動スペースを利用して、学習支援を始めた。これが、今現在まで続いている学習支援活動

の第一歩だった。初めのうちは、ボランティアとしてたまに来る学生の手を借りて、また塾講師の力を借りて、細々と活動していた。そして8月、活動拠点が移動せざるを得なくなるとともに一時中断、その後12月に遠方からの塾講師の力を借りて亘理町宮前仮設住宅で再開したものの、この活動も短期的なもので、年度終了とともに終わりを迎えようとしていた。しかし、学習環境の整わない状態にある子どもたちはまだまだいる。何とかしなくてはならない。亘理いちごっこ代表理事馬場から、私に声がかかったのはそのような時期だった。

このとき、私は既に大学4年の目前で、ぎりぎりまで活動しても1年間携わっていられるかどうかというところだった。そこで、今後も継続的に関わっていくために、大学1年生を引き込むことに決め、また集団として動きやすくするため対象を教育学部生に絞り、サークルという形をとった。初めのうちは毎回同じ人が行くことも多く、1年生は個人の予定より優先して参加してくれていたのだが、1年生の間に上手く話を広めることに成功し、学年間での引き継ぎもうまくいった結果、現在は総数30人、そのうち2年生が18人、1年生12人となった。また、当初は東北大生だけだったメンバーに、宮城教育大学の学生も友人の話を聞き参加してくれ、学部も教育学部にとどまることなく、学生側の負担も少なくなっている。この状態が続けば、今後も継続的な活動を続けていくことができる状態にまで、推し進めることができた。活動開始後、具体的に時間帯や曜日を決め、実際に活動が始まったのは2012年の4月半ば過ぎからだった。

サークルを通して見えてきたこと

サークル立ち上げ後、順調に大学生と被災地の子どもたちのマッチングには成功したものの、当時の活動の中で、仮設外に住んでいるが学習支援を受けたいという声が出てきた。罹災児童生徒はそこの仮設に住む子どもたちばかりではない。学習支援の手が届かない仮設住宅やみなし仮設（県の借り上げ仮設）等に住む子どもたちもたくさんいたのである。そこで、寺子屋いちごっこの対象枠を拡大し、仮設の集会所を利用できない子どもたちを対象とした学習教室を2012年度9月より開設した。徐々に生徒数も多くなり、曜日も増え、講師・学生講師・生徒たちの意識が高まったこと等により、昨年度の高校受験においては中3生8名全員が志望校に合格することができた。彼らは高校生になってからも定期試験前にはいちごっこに集まってくれる。中学生たちが勉強する中、共に試験勉強をするなど、高校生の先輩として、これから高校受験を迎えようという中学生たちに直接的な刺激を与えてくれている。寺子屋いちごっこが横だけではなく、縦割りの学びの場ともなっているのだ。

そして2013年度。今年度の中3生は中学校に入学する直前に東日本大震災の被災者となった。入学時期は遅れ、入学しても普段の授業体制に入るにはそれから有に半年を要したのである。普段の体制とはいっても、それまでの半年の遅れを取り戻すために、生徒たちの理解度を度外視した授業を進めるほかなかったのが被災地の教育現場の現状であったように思う。その結果彼らの学力は惨憺たる状態にある。この現象は学力の低下と呼べるものではない。震災によって学力を身につけることができなかったのである。ことに中学から学ぶ英語に関しては全く基礎が身に着かないうちに新しい単元を繰り返してしまったために、皆無と言っていい生徒が続出している。

これらの現象は教育現場の条件が整わなかったことによるものだけではない。震災によって家庭環境もまた劣悪化していた。被

宮前学習室　中学生・英語の授業風景

災地において罹災した者、また復興のために働く者の疲れがこの東北の地を覆っていると言っても過言ではない。子どもたちもまた同様あるいは、それ以上に疲弊していると言ってもいい状況である。震災直後、大人たちは生きていくこと、生活していくこと、再建していくことに必死になっていた。精神的ダメージも非常に大きかった。子どもたちは親のそのような状況を感じ取り、本来であれば甘えられるところを大人の顔色を見ながら様々なことを我慢してきたのである。実際私たちが活動を開始した時期にも、次のような経験をしたことがある。子どもたちが遊ぶ際にあまりはしゃいで大きな声を出し過ぎないようにしてほしい、と保護者の方から言われたのだ。その理由は、子どもたちがはしゃぐ声をよく思わない方もいる、というものだった。私はその言葉に違和感を覚え、保護者の方に詳細をたずねると、どうやらお年寄りの方からの声で、「外で子どもたちがうるさいためテレビの音が聞こえない」と言われたそうだ。

こうした我慢を被災地の「今」の子どもたちは重ねてきているのである。しかしその我慢には限界がある。今、その限界が子どもたちにも表れ、今まで何でもなかった子が親に不満を爆発させる、というケースが聞かれるようになってきている。通常であれば、成長過程の反抗期とも取れるのであろうが、先に述べたような状況で過ごしてきた子どもたちのことを考えると、中々軽視することはできない状況にあるように思う。

子どもたちに対して思うこと

被災地の子どもたちの現状を挙げていけばキリがない。なぜなら、これは被災の有無にかかわらず子どもたちに対して言えることだが、子どもたちは一人ひとりおかれている状況が違うのである。だから、一人ひとりから目をそらすこともできない。先にも述べたように、被災地では多くの要因に子どもたちの学力が、そして心が脅かされている。この現状に目を背けたら、今後の被災地はどうなっていくのか。これから先、10年20年と東北の未来を担っていくのは子どもたちなのである。そしてそれを直接的に見守るのは家族なのである。このような中、寺子屋いちごっこの果たす役割は、子どもたちの学習サポートに終わるものではない。子どもたちの精神的サポート、引いては親たちとの繋ぎ手として若干なりとも役に立つことができないかと模索しているのが現状である。

実際にサークルが立ち上がり、活動が軌道に乗り始めた際、子どもたちの求めるもの、保護者の方の求めるもの、こちら側がしていきたいことに、多少なりとも差異があり、その都度方向修正を加えながら活動を続けてきた。相手が小学生であればやはり保護者の方の声は大事にするべきだ。中学生であれば定期試験や受験勉強をしっかりさせるべきだという考えのもとで活動してきたが、それでも子どもたちを見ていて学生側も様々な考えを持ち始め、そこに葛藤もある。そうした声をまとめ、運営していく中での困難は多いが、子どもたちの言葉に励まされることもまた多い。仮設に住んでいる、ある小学生が「先生たちのことを夏休みの作文に書いたよ」と言ってくれた。そういった必要性がある限り私たちの活動の意義はあり続けるのではないか。

今後は、仮設住宅からも子どもたちは少なくなっていくだろう。これはむしろ喜ばしいことであり、私たちの活動は無くなることが最良の結果と言える。子どもたちは大学生たちに対して、とても明るく接してくれる。時には度を過ぎることもあり、叱らなければい

宮前学習室　楽しく学ぶ小学生たち

いちごっこ学習室　高校生と中学生たち

けない場面に遭遇することもしばしばだ。しかし、子どもたちは勉強をしに私たちのもとを訪れてくれる。その日にあったことを私たちに話に来てくれる。だからこそ私は、一人でも二人でも、これからも子どもたちが笑いながら勉強に、遊びに来てくれるような場としてのこの活動を続けていきたいし、残していきたいと思う。

（NPO法人亘理いちごっこ　スタッフ）

「仙台POSSE」のとりくみから

被災地仙台と子どもの貧困

渡辺寛人

はじめに

仙台POSSEでは、東日本大震災以降、被災地支援に取り組んできた。そして、被災地支援の一貫として、子どもたちへの支援も行なってきた。本稿では、被災地の子どもたちを取り巻く状況について、貧困問題という視点から確認していきたい。

被災地仙台の特徴

被災地というと宮城県北や岩手の沿岸部が上げられることが多く、仙台が取り上げられることはほとんどない。なぜ仙台は被災地としての認識が希薄になってしまうのだろうか。

ひとつには、被災者の姿が見えにくいということがあげられよう。仙台市の仮設住宅は全部で1万戸ほどあるが、プレハブ仮設住宅に入居しているのは1割ほどで、残りの8割以上が民間賃貸のアパートの「みなし仮設住宅」に入居している。したがって、仙台の被災者は、他の地域と異なって、都市部に分散しているため、その姿が見えづらいのである。

もうひとつには、「雇用の回復」を中心に、好調な経済動向が多く報じられていることがあると思われる。たとえば東北三県の求人は軒並み好調で、とくに宮城だと15ヶ月連続で有効求人倍率が1倍を超えている。宮城県の求人の多くは仙台とその周辺にあるため、仙台は「もう大丈夫だ」と認識されてしまうのではないだろうか。問題は、「ただの雇用のミスマッチなのではないか」という話になってしまっているのだ。

しかし一方で、仙台市の貧困は、震災以降拡大し続けている。いくつかデータを参照しながら、貧困の広がりを確認していこう。貧困の拡大をもっとも端的に示しているのが、生活保護受給者数に関するデータだ（表1）。震災直前の2011年2月の保護率15・8‰に対し、2013年7月には16・14‰にまで上昇していることがわかるだろう。わずかな上昇に見えるが、実際には震災以降人口が増加しているため、母数が増えている。したがって、量的には相当数が生活保護を頼らざるを得ない状況に陥っているということになる。

震災後の貧困は、被災者により集中的に現れている。それを示すデータが、一般社団法人パーソナルサポートセンターが行なった調査である。それを基にして作成したのが、表2だ。仙台市の

（表1）

	2011年2月	2011年4月	2011年7月
受給世帯数	11,382	11,534	12,167
受給人員数	16,497	16,743	17,177
保護率（‰）	15.80	16.04	16.14

‰（パーミル）は1000分の1を1とする単位

平均所得がおよそ５００万円程度あることを考えれば、仮設住宅に住む人々がいかに貧困に近いかがわかるだろう。65歳未満（表２「under 65」）の平均所得は、プレハブで２４４万円、借り上げ（みなし仮設）で３１６万円となっている。この調査が行なわれたのは２０１２年の夏前であるため、所得の高い人の生活再建が進み、平均値はさらに下がっているであろう。また、注目したのは、正社員率の低さである。仮設住宅に住む被災者の３～４割程度しか、正社員として働くことができていない。多くは非正規という不安定な働き方を余儀なくされている状況にある。

先ほど「雇用の回復」について触れたが、その内実はどのようになっているのか。実際に仙台に出ている求人をみてみると、警備の仕事が非常に多くなっている。警備の職の平均賃金は15万円程度で、手取りにすると12万円ほどになる。低賃金であるにもかかわらず、３ヶ月や半年ほどの短期契約が中心となっている。このような低劣な雇用が復興需要と連動して膨らんでいる雇用の中心を占めている。労働市場がこのような状況では、いくら仕事に就いても、生活再建は難しいだろう。また、復興需要と連動して出てきている仕事は、すでにしぼみ始めている。震災前の宮城県の有効求人倍率の平均は０・６～０・７倍であったが、ここ数年でその水準まで落ち込んでいくことになるだろう。貧困問題がより明らかになってくることが予想される。

子どもたちの状況

こうした状況下で、子どもたちはどのような状況に置かれているのだろうか。その一端が、仙台ＰＯＳＳＥが行なっている支援から垣間見える。私たちが支援を行なっている仮設住宅の子どもたちは、大変荒れている。勉強に集中することが難しかったり、支援者に対して暴言を投げつけてくるケースは珍しくない。勉強を開始するまでに大変な労力を要する状態だ。このような状態は、しかし震災以前からあったものではないらしい。親などに話を聞くと、「以前はこんなに荒れていなかった」という。つまり、震災後、子どもたちが荒れているというのである。

そして、子どもたちとのかかわりの中から見えてくるのは、親の状況だ。私たちは夕方18時～20時頃まで支援を行なっているが、支援を終了しようとすると、家に帰りたがらない子どもたちがいる。理由を聞くと、「家に帰っても誰もいない」「ご飯がない」ということらしい。

家族と地域の弱体化

ここでは、子どもたちがなぜ震災後荒れているのかを、親の状況に焦点を当てて考察してみたい。ＪＩＬＰＴが２０１２年に行なった、「子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査」を参照しながら、被災地の親が抱える課題を見ていこう。

はじめに、「仕事と家庭生活のコンフリクト」を見てみると（表３）、多くの世帯で、仕事か家庭かを選ばなければならない状況下に置かれたときに、仕事を選択するという結果が出ている。つまり、親が働いている場合、その矛盾は、仕事よりも家庭生活に押し付けられることになるのである。

次いで、「暮らし向きが苦しいと感じる世帯」の増加傾向を見ていこう（表４）。全国的に暮らし向きが苦しいと感じる世帯は増加傾向にあるが、とりわけ東北３県では他の地域よりもハイペースでこの傾向が進

（表２）

	プレハブ		借り上げ	
	under 65	over 65	under 65	over 65
被災当時の世帯所得平均（円）	２８８万	２１４万	３５４万	２５８万
調査時の世帯所得平均（円）	２４４万	１９９万	３１６万	２４２万
正社員比率（%）	２９．１		４５．１	
非正規社員比率（%）	３１．２		２７．１	

んでいることがわかるだろう。すでに仙台で貧困が拡大していることは確認したが、ここでも暮らしぶりが悪化していることが示されている。

暮らしぶりの悪化は、親世代を労働市場へ駆り立てる。とくに仮設住宅の人々は、生活再建や子どもの教育費のためにと、これまで専業主婦だった母親がパートで働きに出るケースが多い。また、震災を契機にひとり親になった世帯も少なくないだろう。したがって、震災以降、親世代の負担が増加しているのである。

働く親に対して、「被災3県で不十分だと思われる国・会社の支援」を聞いた項目がある（表5）。それによれば、就業時間の配慮（46・7％）が1位であり、2位に保育園・学童保育の拡充（32・7％）、3位に家事・育児の援助（27・1％）であった。労働が育児や子育てを行なう余裕を奪っていることがわかるだろう。そして、それに対応するはずの社会福祉が、十分に機能していないことも示唆されている。そしてこの状況は、先ほど確認したように、家庭生活へ矛盾が押し付けられてしまうのである。以上のように、震災以降は、家族が子どもを支える機能を失っているのである。

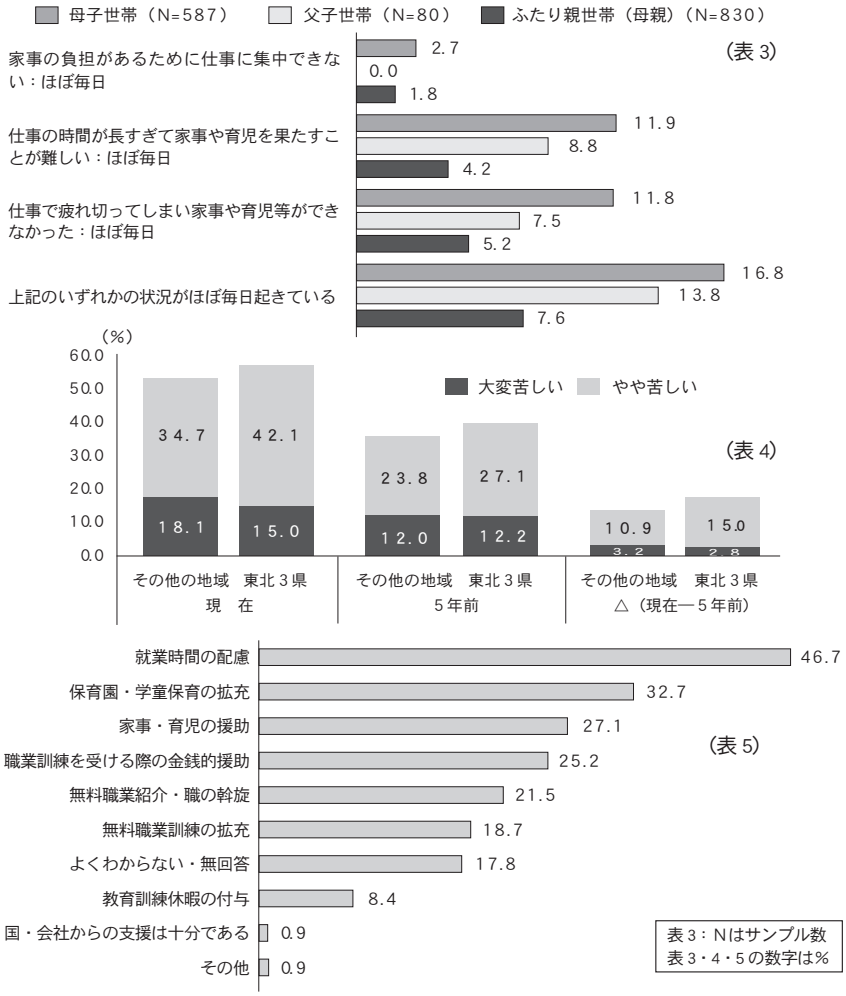
それに加え、震災はもともとの地域コミュニティを破壊してしまった。これまでは家族や地域で子どもを支えていた側面があったが、それも失われてしまった。このような環境の変化と、それに対応するはずの社会福祉の不在が、子どもたちへの支えを奪っているのである。

おわりに

以上みてきたように、震災を契機に子どもたちを支える環境が急速に弱体化している。この状況に対応するためには、子どもを育てるという機能を親に押し付けるだけではなく、社会で支えるという方向に転換していく必要があるだろう。

仙台ＰＯＳＳＥでは、仮設住宅で学校を終えた子どもたちの学習支援を行なっている。そこで見えてくるのは、学習以外にもさまざまな課題を抱える子どもたちの姿だ。この課題に対応していくためには、親や一支援団体だけでは不十分であると感じることが多い。こうした子どもたちを支える新たな社会福祉制度を構築していくことが求められているのである。

（ＮＰＯ法人ＰＯＳＳＥ仙台支部　代表）



子どもたちの読書活動に取り組んでいるみなさんにお願いして、お薦めの絵本や児童書を紹介していただいた。なつかしい本から初めて知る本まで、さまざま。冬休みの読書の参考にどうぞ。

幼児期に楽しい絵本との出会いを

～読み継がれてきた絵本～

酒井　文子

1963年12月、福音館書店の月刊絵本「子どものとも」により、絵本『**ぐりとぐら**』が世に出てから今年で50年になる。今日まで広く日本中の子どもたちに親しまれ、読み継がれて来ている。20代の学生に『ぐりとぐら』を読んでもらったことがある人は、と質問したところ8割以上の人が読んでもらった覚えがあり、そのまた8割以上の人が、保育園や幼稚園、文庫、学校等の集団の場であったと聞いたことがある。読み聞かせの原点は家庭にあると言われるが、すべての子どもが恵まれた家庭環境にあるわけではないので、集団の場での読み聞かせが本との出会いの大切な役割を果たしていると言えるだろう。

これはおはなしおばさんとして知られる、藤田浩子さんから聞いた話だが、藤田さんが以前、福島県三春町で文庫を開いていた頃、よく文庫に来ていたAさんが、長じて東京に就職、働いていたがある日、職場でとても嫌なことがあり、ひどく落ち込んでもう仕事を辞めて田舎へ帰ろうかとくじけそうになってふと立ち寄った書店で『ぐりとぐら』の表紙が眼に入った。そのとたん、子どもの頃に文庫のおばちゃんが三春弁丸出しで読んでくれた『ぐりとぐら』のなまった読み声が耳に聞こえてくるように浮かんできて、涙がこぼれそうになり、懐かしさと同時に温かい気持ちに心が和み、こんなことでくじけないでもう一度やり直そうと前向きになれたのだという。

人生で困難に出会った時、子どもの頃の思い出が背中を押してくれることがあるというとても好いエピソードだと思った。

幼児期に愛情のこめられた生の声で、豊かな言葉を耳からたくさん聞いて想像力を育てることが、その後の人生を豊かなものにしてくれる。子どもたちの身近にいる大人が、子どもに本を読んであげる人になってほしい。

この50年の間、日本でも優れた絵本作家が育ち、優れた絵本がたくさん出版され、子どもの手の届くところに好い絵本が揃っているという環境が少しずつ整ってきている。

今年87歳になるかこさとしさんが、40年間胸に温めてきたという『**からすのパンやさん**』と『**どろぼうがっこう**』の続編が相次いで出版された。子どもたちに人気があり読み継がれてきたこれらの絵本の続きの物語が読めるのは嬉しいことである。どなたも子どもと一緒に絵本を囲んで幸せな楽しいひとときを過ごしてほしい。

★その他おすすめ絵本

・浜田桂子 作
『へいわってどんなこと?』（童心社）

・山中恒 著／木下晋 絵
『ハルばあちゃんの手』（福音館書店）

・エリック・リトウィン 著
ジェームス・ディーン 絵
『ねこのピート』（ひさかたチャイルド）

（みやぎ親子読書をすすめる会　代表）

小学生にも 絵本の素敵な世界を

杉田　良子

最近、小学生に読み聞かせした中で、子どもたちがとても喜んで、作品の世界に入り込んでくれた絵本を紹介します。

低学年の子どもたちには、

シビル・ウェッタンシンハ作・絵
松岡享子 訳
『きつねのホイティ』（1994　福音館）

スリランカの小さい村にすむアンゴウさんのところに、人間にばけたつもりのきつねのホイティがやってきて、ごちそうを乞います。アンゴウさんはわざと気づかないふりをしてもてなしますが、そうとはしらないホイティは歌います。

ホイティトイティ／ばかなアンゴウはだまされて／ごちそうだしてもてなした／
ホイティトイティホイティティ

同じようにマンゴウさん、ランゴウさんのところでもホイティはばかにして歌います。それを聞いて怒った3人はとても素敵なこらしめをするのです。

スリランカの豊かな自然の中にかわいい動物たちと村人たちが柔らかい色彩で描かれています。

楽しくリズミカルな歌で、子どもたちも踊りだしそうな絵本です。

中学年の子どもたちが最後のページで「あぁ～ほっとした」と拍手喝さいしてくれました。

宮沢賢治 作／三谷靭彦 絵
『狼森と笊森、盗森』（1985　講談社）

賢治は教科書にも多く取りあげられていますが、この作品は岩手山が厳かに登場するダイナミックなお話です。

岩手山の噴火がしずまって、森や野原ができた頃、4人の百姓たちがのっしのっしとやってきました。「ここへ畑起こしていいかぁ」と叫ぶと「いいぞう」と森はいっせいにこたえます「ここに家建ててもいいかぁ」「ようし」。

森に許しをもらって男も女も一生懸命働きました。森は北風から子どもを守りました。不思議なことがおこり、子どもたちがいなくなると狼森で、農具がなくなると笊森で、あわもちは盗森でみつかります。

三谷靭彦氏の絵は10数人の子どもたちが寄り添いあって、または読み手の膝にのせて、長いお話ですがひきこまれます。大きな自然と小さな人間の営みを感じとれる絵本です。

ぜひ、絵と物語を楽しんでください。

高学年になると、絵本は幼い子が読むものと敬遠しがちです。しかし、子どもたちがはじめて出会う芸術としての絵（太田大八『だいちゃんのうみ』のように）、深いメッセージと希望（バートン『ちいさなおうち』のように）が満載で、大人になっても手にとりたいものばかりです。

高学年の子どもたちに。

マイケル・フォアマン 作・絵
柳田邦夫 訳
『少年の木』（2009　岩崎書店）

訳者の言葉

「この世界に希望はあるのか。がれきのなかに芽生えたちいさな緑の葉に、無心に水やりをする少年のピュアな心。鉄条網の向こう側でも少女が―。2ほんのブドウの木は成長し、世界を分断していた鉄条網を覆い尽くす。世界を再生させるには、何が求められているのか。」

今西祐行 文／松永禎郎 絵
『すみれ島』（1991　偕成社）

作者の言葉

「南の海に散って行った若者たちをしのび、花の種を増やして、平和を考え合おうという主旨の会がある。わたしも特攻花を思って、作品を書いた。それを松永画伯が咲かせてくださった。」

私事ですが母は、長崎で被爆しています。父は、海軍で人間魚雷に明日出発というところで終戦を迎えました。鹿児島で幼いおじ達は飛行戦をまのあたりにし、特攻機も見送りました。語り継がれていかなければならないことと、今だからこそ思います。

（小学校図書事務）

自己を育てる

石川理恵子

ラヘル・ファン・コーイ作
松沢あさか 訳
『宮廷のバルトロメ』
（2005　さえら書房）

17世紀スペイン、フェリペ4世の時代。宮廷では異形の人たち（小人・黒人・奴隷・障害者等）が多く集められ、小姓になったり道化として王侯貴族の退屈をまぎらわす玩具として迎えられ、さげすまれてもいた。

この物語の主人公バルトロメ（10歳）は小人で背中が曲がって足も不自由。田舎の村で母と兄弟姉妹（6人）でつつましく暮らしていたが、宮廷で御者係を務めている父に家族ごと呼び寄せられる。バルトロメは村に残されるのを嫌がり、父と姿を誰にも見られてはいけない事を条件に行くが、部屋に閉じ込められたみじめな生活を余儀なくされる。そんな折、兄が街で小人で宮廷の文書係エル・プリモを見て、バルトロメに読み書きができるようにと父には秘密で僧院に通わせる。希望を持ったバルトロメは、母と姉の協力も得てめきめき上達してゆくが、突然の事故で王女マルガリータの目に止まり、宮廷で人間犬として王女のペットにされ、人間とは見なされない地獄の生活を送る。宮廷画家のベラスケスは人生最後の作品に王女と女官たちを描くが人間犬だけはどうしても描けない。クライマックスは父が画家の徒弟たちと智恵を出し合いバルトロメを宮廷から救い出す。バルトロメの「一人の人間として認められたい」というまっすぐな心が成功につながった。

津谷タズ子 文／西山三郎 画
『月の光でさらさっしゃい』
（1985　童心社）

この本に収められた7つの昔話は、山形県新庄市で生まれ育った津谷さんが、幼い日に父母から聞いた昔話を活字にしたもので、土地の言葉のまま語り口調で書かれている。

「月の光でさらさっしゃい」とは「月の光でさらしなさい」という意味。あらすじは、父母の間でめんこがられて育った娘は婿さんを迎え不自由なく暮らしていくうち、だんだんと婿さんのことがやんだくなってくる。困ったことがあったら沼のばさま（智恵者）の所へ行って相談すると良いと聞いたことを思い出し訪ねてゆくが、再三「帰れ、帰れ」とさとされる。それでも言う事を聞かぬ娘に、ばさまはあることを教えた。娘は一途に言われた通り実行する。やがて婿さんは……。

自分の屈折した心から出た不幸にもがき苦しむ娘。挫折感を感じる作品は少ないが、思春期の子どもにはこんな心も人間の自然な姿である事を感じてもらいたい。できれば、黙読より読んでもらって耳で聞いた方が楽しい。

★その他おすすめ図書

エリアセル・カンシーノ作
『ベラスケスの十字の謎』
（1998　徳間書店）

埜納タオ 作『夜明けの図書館』①②
（2013　双葉社）※コミック

（仙台 どろんこ文庫）

報告　フォーラム「子どもの今と未来を考える」
PARTV

「子どもと読書」の今、これから

～“大好きな一冊”との出会いのために～

須藤道子

フォーラムは、今、この時を生きる子どもたちの育ちに思いを寄せあう場として、さまざまなテーマで語り合ってきた。

子どもたちが、本を読むことの楽しさに出会い、その世界を広げながら成長してほしいと願って、今回のフォーラムを持った。フォーラムでは、子どもたちが日々の暮らしの中で、読書をどのように位置づけ、どんな本とどんなふうに出会っているのかを話し合った。

読書は能動的な営みで、当人にその気がなければ読み続け、その楽しさを自分のものにすることはかなわない。手渡す大人の介在は大きい。報告してくださった皆さん、フロアから発言してくださった皆さんなど、子どものそばにいる方々の地道な取り組みに頭が下がる思いでお話をうかがった。

《話題提供の皆さん》

◇杉田良子さん（小学校図書事務）

児童数80名の小学校勤務。大きい学校の子どもたちより図書室が身近。学年を問わず、先生自身が本好きであるかとか、図書室に興味があるかなど担任によって子どもたちの利用頻度に違いがでる。連休や長期休みの前など、先生が「図書室にいっておいで」と声掛けしてくれるのは大きい。学校を長く休んでいた子が「フロド（『指輪物語』）も頑張っているからと、物語の主人公に自分を重ねて元気に登校してきた。子ども時代の読書体験が、豊かな想像、創造的な生き方の一つの指針となってくれることを願っている。

◇酒井文子さん（みやぎ親子読書をすすめる会）

子ども時代に本を読んでもらう幸せを、一人でも多くの子に経験してもらいたいという思いで40年、親子読書運動を続けてきた。『ぐりとぐら』が誕生して50年。日本人作家の絵本が出るようになったのは1963年頃からで、同時期に家庭文庫が盛んになった。この頃は家庭にテレビが普及した時代に重なる。今はゲームの存在が子どもたちを本から遠ざけている面もある。

◇伊藤真弓さん（小学校教師）

先生の呼び掛けが大きいと言うのはその通りだが、時間に追われて教師自身でさえなかなか図書室にも行けない。多賀城の学校司書は市の図書館から派遣されるシステム。市図書館の老朽化による建て替えを機に「蔦屋書店」に指定管理される。今後図書室はどうなって行くのか、公共図書館と書店が同じ空間におかれ、飲食などの娯楽的な施設も併設されるという。子どもたちは大切にされるのか、本を読む楽しさと出会える場になるのか心配。

学校での読書体験・図書室で見る「子どもと読書」

○　毎日の利用は1割程度の子ども。雨の日は3割ぐらいか。授業で習った本や読み聞かせてもらった本を探しに来る子、折り紙だけしに来る子、ぼーっとしていく子などさまざまだか、20分の休み時間座り込んでじっくり読んでいく子も。高学年になると委員会の仕事で休み時間も忙しく、学芸会など行事が近づくと休み時間も練習で図書室は閑古鳥が鳴く。図書室にこられないならと50冊ほどずつ教室に持ち込んでいる。押し付けがましいが働きかけが必要と思う。　（杉田）

○　仙台市は数年前から学校図書推進活動をすすめていて、1年に32冊の読書を呼びかけている。1週間に1冊のペース。１００冊を読む子もいる半面、冊数を追うあまり斜め読みの癖をつけてしまう子も。進んで図書室に来ることのない子は10冊未満、見かけたら声がけをするようにしている。読む習慣のない子、環境のない子には学校図書館は本に出会う最高の場。よく読む子のいるクラスは周りの子も影響されてみんな良く読み、感動も共有している。なかなかこちらの望む本に目を向けてもらえない。さし絵だけ見る子には「お家で読んでもらって」と手渡すが、親たちも忙しく読んでもらえていない。子どもたちは高学年になっても読み聞かせしてもらうことを楽しみにしている様子。年間予算は27万で学校規模により異なる。　（杉田）

○　朝読書はクラスごとに違うが、昼の読書タイムで10分ほど全校一斉に本を手にする。子ども達は6時間授業が増えて、とにかく時間がない。

多賀城市の調査では一年間に小学生で95冊（目標60冊）中学生44冊（目標24冊）読んでいるという。司書は市費で、ほぼ毎日くるが午後2時までしかいないので放課後の貸し出しはできない。朝読書の時間はクラスごとに違うが、週一回どこかの学年に読み聞かせボランティアが入っていて、子どもたちは本当に一生懸命に聞いている。読む子と読まない子、極端な二極化が進んでいると感じる。図書予算は学校規模に関係なく一律化していて年間19万。　（伊藤）

○　何年仕事しても、どう子どもたちを読書に誘うか悩みは尽きない。毎日の朝読書以外は読まない子が7割。大人になっても本に親しめるよう高校時代に何かつかんでほしいが、学校図書館が本に触れる最後の機会という子も少なくない。学校裁量で決まる図書予算は格差が大きく、仙台市内は１００円～２００万。勤務校は50万円以下の予算の中でＤＶＤ等の視聴覚学習のものも購入、古本なども利用して工夫している。最近子どもたちの間ではやったのは、石田衣良の『4TEEN』『約束』など、優しい気持ちになれそうなもの。朝読書の後は集中して授業に入れるようだ。　（高校司書）

○　現職時代、最後の学校では6年生を3回担任した。道徳の時間はいつも読み聞かせ、給食時間も読んで子どもたちは続きを楽しみに待ってくれていた。落ち着かない6年生も『バタン島漂流記』など、集中して聞いてくれて、12月には吉村昭の『漂流』に進めた。生き抜くためにどうするか、そのなかでの人間どうしの結びつきに惹かれたのだと思う。　（参加者）

○　子ども達は都市伝説とか「こわーい話」の本を好む。朝読書は本に触れ合う機会としては良いが、朝読書で学力アップとか報じられているのを見ると「手段」に使われてしまうことに抵抗がある。「天気のいい時は外で遊べ」などのように図書館にいると、陰気くさく友だちが少ないなどのマイナーなイメージで言われるのも疑問。学校はせわしくて、「また明日」の「明日」がなかなか来ない。　（参加者）

○　小学校で読み聞かせボランティアをしている。卒業の時期には「卒業する君たちへ」と題して本の展示をしている。創氏改名の頃のお話の『もくれんの咲く庭』、妹が亡くなって失語症になってしまった少女のお話『屋根に上って』など。感性を言葉にすることが難しい思春期の子どもたちに何か共感してもらえればと思う。子どもたちには、どんなに苦しいことがあっても人は生きるに値するということを伝えたい。　（参加者）

幸せな本との出会いのために

○　福音館の松居直さんは、「絵本は大人が子どもに読んであげるものであり、字を読んでイメージがわくようになるにはたくさん耳から聞くことが大切。そうして、豊かな言葉が育っていく」と語っている。家庭でそんな体験ができることが基本だが、案外多くはなく、集団の場で体験できることも大きな意義を持つ。先生が長い物語を何回かに分けて読んでくださって「続きはまた明日！」と、そんな時間がとれたらいい。読んでもらう絵本を卒業して自分で読めるようになっていく中で、言葉から何かをイメージできる力が身に付いていく。加えて、生活体験を豊かにもって、雨の音、水の音、五感を豊かに育てて目に見えないものを感じる力が育つといい。　（酒井）

◇　毎月読み聞かせの勉強会を続けている。家庭で読んであげる時はとにかく一緒に楽しんで読めれば十分。親子の幸せな体験として人生の糧になる。家庭文庫も、かつて県内でも40ほどあったのが、今は10ぐらいと随分少なくなっているが、頑張っている人たちは多い。子どもたちも忙しくなってきており、また、他のことに興味関心が広がっているということもあるが、そこに文庫があることが大切と思う。すぐれた絵本は絵が物語るといわれるし、年齢を問わず鑑賞に値する。　（酒井）

○子どもたちは活字の無い絵本で想像することを楽しむし、想像することを助ける絵ということもある。教室で子どもたちに読んであげて、泣きながら聞いてくれたりしたが、そういう経験が子どもたちを本に近付けてくれているといい。　（参加者）

子ども時代と読書、それぞれの体験

○　高校では、図書館は勉強する場所だった。大学生になって自分の本を手元におきたいので購入することが増えた。子どものころに読んだ本で記憶にあるのは『ぐりとぐら』『エルマーの冒険』『はらぺこあおむし』など。　（参加者・大学生）

○　子育ての中で楽しい読書体験をした。子ども三人と読んだのは共通の思い出。今では子どもたちにすすめられて読む本も多い。父親が本好きでたくさん本が見近にあったことは良かったようだ。　（参加者）

○　子ども時代、親戚からもらった雑誌『少年クラブ』の「少年ケニヤ」を読み、田舎町の暮らしの中でアフリカを想像して世界が開けた。そのあとの様々な読書体験で人生の不思議さに出会った。本との出会い方は様々個別だが、これだというものに出会えればそこからの成長が大きい。映像は受け身だが、読書は能動的。本が読めるということは自立していく一歩。本好きな子は他者の気持ちもワン・クッションおいて考えることができる。　（参加者）

○　電子書籍で読むのと活字の読み物とはどう違うのだろう。

・　電子版では文字の本にある「めくる」という行為がない。そこだけ画面に出ているのを読むのとの違いは大きい。

・　本は中味も装丁もふくめて本。　（参加者）

子どもの本には長く読み継がれているものが多い。その背後には、作品の力とともに、「こんな本をこんなふうに子どもたちと読んでいきたい」と、子どもと本の幸せな出会いを願う人たちがいる。それはまた、どんなに作り手たちを励ましてきたことだろうと思いいたる。そこに、その社会の「子育ての文化」の豊かさにつながるものがあることを思いながら皆さんのお話に聞きいった。

詩人長田弘は、読書について、『なつかしい時間』（岩波新書）にこう書いている。「読書とは本を読むことではないと、私は思っています。読書は本を読むことでなく、本に親しむという習慣のことであるからです。本は読まなくても困らないし、読んで分からなくてもかまわない。読書の原点となるのは、自分の日常の中に、とにかく一冊の本がある。なければ置く、ということであり、ともかくそこに本があるということから、読書という経験は始まります。（中略）『分からぬ。それでも気持ちがいい』そのような、包容力を育てるものとして読書のあり方がいまは忘れられていないかということを考えます。」

（事務局　フォーラム担当）

3・11　2年半後の今考えること　1

被災保育所支援の取り組みから思う

小幡幸拓

復興支援担当として

宮城県保育関係団体連絡会では、東日本大震災後に全国の皆様から全国保育団体連絡会へ寄せられた支援金をいただき、昨年度より「宮城県震災被災保育所支援センター」を立ち上げ、東日本大震災復興支援担当として専従を配置し、被災地の保育、子どもや子育て環境の実態の調査を行い、支援活動や自治体、厚労省との懇談を行ってきました。

沿岸被災地の保育施設、子どもを取り巻く状況は、未だ劣悪で過酷な環境下にある所も多く存在します。宮城県内では、震災により被災し建物が使用できなくなった認可保育施設が25箇所ありますが、新園舎が建設されたのは5箇所で、20箇所は未だに仮設プレハブ園舎や児童館、公共施設等での間借り保育が行われているのが現状です。

震災後の子どもや保護者の状況

子ども達や保護者に影響が出ないはずはないと考え全児童と保護者の方に震災時とその後の様子について聞き取り調査をしている保育所もあります。

沿岸北部では、生活再建の為の就職活動やリフレッシュでの保育要求が増え、震災前までそれほどニーズのなかった「一時保育」「休日保育」のニーズが増え、多くの認可外施設が公的補助もほとんどない中で受け皿になっています。

メンタルケアの問題も重要な課題です。被災規模の大きかった沿岸地域では、子ども達が「荒れている」という声が多く聞かれています。震災の記憶だけでなく、親の就労問題、長引く仮設住宅生活等、生活の見通しが見えない状況の中でネグレクトや暴力といった虐待が日常的に繰り返されているのではないかという不安の声も多く聞かれます。

メンタル問題は子どもに限ったことではありません。「津波の恐怖が頭から離れなくて震災当時勤務していた所で働く気になれないんです」「どうしても思い出すので未だに海に近づけません」「疲れのピークに達していて精神的、体力的に限界を感じている」「休みの日でも津波が来るかもしれないという恐怖は常にある」等、被災地の保育士からこういった声が多く聞かれます。津波を経験した保育士達の心には、今も大きな傷が残り、癒える事なく日々を過ごしているのが現実です。

状況改善に向けて　～提言と懇談～

各地域での震災当時の保育実態や、震災後の現場、制度的な課題を聞き、我々と関連4団体で「震災を教訓とした保育政策への一次提言」という提言を作成しました。その提言をもとに、県議や県の子育て支援課との懇談も行いました。2013年2月に行った、宮城県子育て支援課との懇談後には、要望項目の中から「防災無線の設置」「建物の耐震診断」について、県の方で実態の把握がされていなかった事が明らかになり、翌日には宮城県子育て支援課から県内の全保育施設に実態把握の調査が行われました。実態の調査・把握だけでなく、自治体へ働きかけることで、少しでも状況を改善していけるということを改

めて感じました。

この提言の基になった震災時の事例と、保育現場の実態を合わせた内容で、『東日本大震災が教えるいのちをまもる保育の基準』（かもがわ出版）という本を書きました。この本が発売されたことで、被災地の保育環境の改善に繋がるだけでなく、全国の保育関係者が被災地の保育実態を知り、教訓として、全国全ての子どもの「いのちをまもる」という視点で、震災を被災地だけの問題とせず、自分たちの身に寄せて考え、全国の保育士や保護者、子どもに関わる全ての人が「保育制度の設計者」であるという意識を高めるきっかけになればと切に願っています。

地域の復興とともに

これまでの活動であらためて感じたのが、子どもは地域の中で育ち、生活しているということでした。震災時の事例でも、地域住民や施設間の連携等多くの保育施設で地域の方の助けがあったから子ども達を守ることができたという声をたくさん聞きました。保育施設が再建される前提として、そこには人が住み、生活するコミュニティがあり、町が存在します。ですから、我々の支援活動というのは、保育の復興であるとともに、地域の復興なのだと思います。被災地に足を運ぶたびに、仮設住宅で生活する高齢者の方やそのご家族も一体的に支える支援の必要性を強く感じました。そういった思いから、仮設住宅で物作り・販売をされている方の支援も行ってきました。

地域の人が元気になり、子どもが笑い、「夢や希望を語り描いていく」ということができた時に、「復興」が見えてくるのではないかと思います。昨年度一年間の経験、繋がりを大切にし、被災地に生きる子ども、保護者、保育士、地域の人達それぞれの思いに寄り添いながら、制度の改善を訴え、被災地の今を全国に発信し、連帯的な運動に繋げるということを活動の柱とし、活動を続けていきたいと思います。

（宮城県保育関係団体連絡会
東日本大震災復興支援担当）

3・11　2年半後の今考えること　2

つらかったら、また来ていいからね

廣野清子

私は小学校に勤める養護教諭です。1年3ヶ月後には定年退職の予定です。勤務年数は長いのですが、勉強不足・努力不足の未熟なままで定年を迎えることになりそうです。

この2年半の間、自分はどんなことを思い、過ごしてきたのか。教員らしからぬ自分勝手なことに終始するかもしれませんが、書かせていただきます。

自分が住んでいる気仙沼市は3・11東日本大震災で大きな被害を受け、勤務する学校の学区の半分は津波のために壊滅的な状況となりました。在籍していた子どもたちの家庭のほとんどが何らかの被害を受けました。保護者を亡くした子、祖父母や兄弟を亡くした子、住宅を流された子、親が失職した子など大勢います。保護者の経済的な被害は大きく就学援助費を申請せざるを得ない家庭が半数に上りました。震災前は1割程度だったものが4倍増となったので、市の就学援助家庭の認定に時間がかかり、決定が1学期末にずれ込みました。そのため、例年5月から6月にかけておこなう日本スポーツ振興センターとの契約手続きでは、収めていただいた掛金を、後日返金するという形を取ったので、返金事務に時間がかかりました。就学援助申請の数は震災後2年たった今年は僅かに減少していますが、この気仙沼地方の全体の経済的な状況は好転しているとは思えません。

震災直後は、子どもたちに早く「日常の生活」を

取り戻してあげることが大切と思い、職員は夢中でした。地震の被害のために、校舎の3分の1が使えず、大きめの特別教室2教室を2クラスの合同の教室として使わせることにして2週間遅れで新学期をスタートしました。校舎の一部が2次避難所として使われていましたので、窮屈な環境でしたが、学校に登校してきた子どもたちはとても元気で友達や職員との関わりを待ちわびていたのがよくわかりました。子どもたちの笑顔に私達も元気をもらっていたような気がします。

職員の3分の1も被災していました。家を流され、家族を失っているのに、学校再開に向けて頑張っていました。6年生の担任だった2人の職員は心をひかれながらも転任していきました。職員の肉体的な疲れはもちろんのこと、精神的な疲れをどのようにして解消していっていたのでしょうか。私は養護教諭として、仲間として何かしてあげられることはあったはずです。

私自身もローンの残る自宅が大規模半壊になり、その対応の手続き等がいろいろありましたが、タイミング良く退職した夫にすべてやってもらうことができたので、気持ちは楽でした。学校の子どもたちに関心を向けることができたからです。学校に来てくださったカウンセラーの方々に職員全員が面談してもらえる機会があり、私は震災直後の避難所において、「自分がなにもできなかった」ことを聞いてもらいましたが、しゃべりながら「自分の医療知識の乏しさや技術への自信のなさから、積極的に動くことができなかったのだ」ということを自分ではっきり自覚することができました。気持ちのモヤモヤが少し解消しました。カウンセラー体験ができたことは良かった点です。

この震災で大きな被害を受け、子どもたちの生活環境は大きく変化しました。「仮設では、外の足音が気になってよく眠れない。」「バスに乗らなくちゃならないから、遊べない。」という生活の不便さについての不満や、遊び場の減少による運動量の減少・肥満の増加等の問題や親の経済的な悩みや仕事上でのストレスによる家庭内の問題が子どもたちのまわりで起きています。そして子どもたちは傷ついています。この2年半の間、保健室で特別なことはしていません。大事にしなければならないと思っていることは、保健室に来た子の気持ちに寄り添ってあげることです。「指をけがした」「ころんで膝をすりむいた」という理由で保健室に来た時、「痛かったよね。」「よくがまんしたね。」といいながら、養護教諭は手当をします。「自分でできる手当はきれいに洗うことだよね。」と指導の一言を付け加えるかもしれません。体調不良を訴えてきた時も、「痛いのね。いつからなの?」「朝ごはんは?」「よく眠れてるかな?」といいながら、おでこに触れたりしています。(小学校だからできることもあると思いますが。)その原因の中に震災後の家庭や生活上での問題があるのでは……。と、必ず考えることにしています。そして保健室から送り出すときは「辛かったら、また来ていいからね。」というようにしています。「また来てもいいんだ。」と思うだけで気持ちが軽くなって、前向きになれるのではないでしょうか。

この2年半、全国からさまざまな支援をいただいています。文具・本・音楽・スポーツ・絵や工作・理科実験・マジック・ケーキやお菓子・果物、それから励ましのお手紙です。

その縁で学校同士の交流も生まれました。全国から寄せられた優しい気持ちに応えられる子どもに育てていくのが、私たち教職員の努めだと思っています。

今、学校の昼の放送では神戸市立玉津中学校の生徒の皆さんが作詞して唄ってくださっているCDを毎日聞いています。それは12月の音楽集会で全校合唱するためです。すてきな歌詞を紹介させていただきます。

充(みち)

作詞　神戸市立玉津中学校
六十六回生　生徒

今　僕たちに　できること
それは悲しみを　一緒に背負うこと
いまだ見えぬ道の上に立ち　まっすぐな瞳で
未来をえがこう
大空に　虹を架けよう
ともに前を向いて　歩き続けよう　えがおの
花を咲かそう
響け歌声よ　多くの傷ついた　こころを癒し
まだ見ぬまっすぐな　自分の道を歩こう

被災地の子どもたちへの応援歌だと思います。大切に歌い繋いでいきます。

(気仙沼市・階上小)

わたしの出会った先生　5

体育教師への（全てではないが一つの）契機

久保　健

小学校時代の僕は、図書室で文学コーナーをあさるか、自宅で父親の蔵書（大衆文学）を隠れ読みするかという、色白でちょっとませた文学少年だった。体育の授業もスポーツ（野球）も好きだったが、それほど得意ではなく、運動会の徒競走ではいつも一緒に走るグループのなかで3～4着というところだった。

中学2年の時に、鈴木という新しい体育の先生が転勤してきた。初回の体育の授業で整列の時にだらけていたら説教を食らった。「コワイ先生！」だと思った。この年は偶然1964年、東京オリンピックの年だった。この年の秋に、体育の授業で初めて「宿題」が出された。オリンピックの新聞記事を集めてスクラップしろというものだった。「へえ～！」と思って、ふだんはあまり読まない新聞に目を通して、けっこう面白がってそれに取り組んだ。

それが終わった頃、体育の授業で長距離走がはじまった。1周200mのトラックを10周する2000m走だった。初めて走った時、短距離はそれほど速くないのだが、そのままスピードを落とさずに走ることができたらしく、けっこういいタイムだった。これに気をよくした僕は、この授業が続いている間、近所の田んぼのあぜ道を走り回って練習し、4回目の2000m走では（陸上部の長距離選手も追い越して）クラスで一番速くなってしまった。

翌年の3月に、鈴木先生から「陸上部に入らないか」と声をかけられた。これまでの人生で「からだ」で勝負したことなどなかったので、舞い上がり気味で入部した。

こうして中学3年から陸上部生活が始まった。グランドのメインの場所は野球部とサッカー部が占領していて、新参の鈴木先生率いる陸上部の練習にトラックが使えるのは、下校時間間際の30分ぐらい、それまでは、校庭の隅に50m×5コースの走路をつくり、目印の杭を打って距離がわかるようにした所で、全体練習を行い、短距離やハードルブロックが練習した。ハードルは、横木の部分を取り除き、引っ掛けるとすぐ落ちる四角い棒を載せて、痛くないように工夫したものを使用した。こうしたグランドづくりや用具の工夫は、その後体育の道に進んだ僕にとってかなりヒントとなった。

また、幅跳びのピットは体育倉庫の前、高跳びのピットは校庭の隅の角地と、あちこちに練習の場は分散していた。長距離ブロックは学校の隣に自動車講習所を作りかけて放置してあった（適度のアップダウンのある）山林でやった。鈴木先生は、長距離の指導は得意ではないらしく、ベースボールマガジン社の本を1冊預けられて、「お前が読んで練習メニューを工夫してやれ」と言われた。中学生レベルの長距離の練習（インターバルトレーニングとペース走を交互に）時間はせいぜい40分ぐらいなので、終わるとハードルやら幅・高跳びやら、あっちこっちに顔をだして一緒にやっているうちに、なんとなくいろいろな種目が一応サマになってきた。また、長距離走のグループは、日曜日には、十数キロ離れた先生の自宅までマラソンピクニックして、お菓子とジュースをご馳走になって帰ってくるという楽しいひと時もあった。

こんな中で、陸上部員はどんどん増え、僕が3年の年（先生の着任2年目）から3年間、県大会で男女とも総合優勝を遂げた。「それほど才能があるわけでもない生徒たちを集めても、県大会で総合優勝させることは、それほど難しいことではないんだ！」そう感じたことが、ひょっとしたら僕が体育の道を選択肢に加えるきっかけになったのかも知れない。

（日本体育大学児童スポーツ教育学部）

教室の報告

1日1歩　3日で3歩　3歩すすんで　2歩さがる

芳賀郁雄

◇学校事情～小規模校の悩み

今年度は1学年の主任ですが、3年生の理科と全学年の技術を担当しています。ですから、1年生の教室に行くことはほぼない状態です。ちなみに1年生は40人に満たない人数で2学級。うち1学級は、新卒の女性講師Kさんが担当しています。

◇中1ギャップの一端!?

4月。2日目から「先生に呼び捨てにされてショックだった」との生徒の感想（無記名）と匿名の保護者の電話がありました。

たまたま、私が電話を受けたので親御さんの言い分に共感しつつ「部活動が始まると、それが当たり前になりますよ」と言うと、「それもそうですね」とお母さんも納得してくれました。

Kさんとは、基本的に授業や物を頼むときなどは、「さん」付けと私は話をしました。Kさんにとっては、ちょっと不安な教員生活スタートになったようです。

◇関係性の問題からトラブルが

入学から2週目に入って、メールを介したトラブルが発生しました。二つの小学校が一つになり、新たな友達関係ができつつある中で発生したトラブルでした。

マキは積極的な女の子。相手の気持ちに踏み込んでしまうのでまわりから少し敬遠されたりします。兄が高校進学で携帯を持ったのを機にマキも携帯を持ち（2台目0円）、違う小学校出身のユリアとメルアドを交換しました。「新しい友達二人と仲良くなってうれしいです」と喜んでいたのもつかの間、メールを通して、子どもだけのカラオケの誘い（〇〇君の親がついてくれる、とのうそ）、△△さんは誘わないようにしよう、などとこれまでに身につけてきた関わり方でユリアとつながろうとしました。

ところがユリアはそのような付き合い方にノーを突きつけ、マキの母親が直接ユリアに抗議の電話をしたりして、ユリアの家族も振り回されることになりました。

Kさんは、次々に展開するトラブル（幼い男子たちの問題もある）に困りました。放課後、二人で相談するとKさんは涙を流してクラスがうまくいかないことを話してくれました。私は、先生は講師だから今年限りの付き合いだけれど、いろいろ取り組みをしてみて、何もしないで問題が起こるより、何かして起きた方が勉強になる、あとは自分が引き受けるから、と励ましました。

4月末のPTA懇談会の後、マキの母親に残ってもらい、マキには携帯の使用は時期的に早いことを伝えました。

お母さんにはメールの危うさを理解してもらいましたが、「全部、娘が悪いのですか」

と感情的にさせてしまいました。お母さんとはマキの兄からの付き合いなので、予想される展開ではあったのですが。

面談後、Kさんとは、これでお母さんは私に対する反発をしても、Kさんに怒りは向かないから、と根拠もない励ましをしました。マキのユリアとの関係は、距離をとりつつ、普通の同級生として接していくことで、問題は解決していきました。

しかし、ユリアにも勉強面や家庭に課題を抱えており、マキとのトラブルは起こるべくして起こったと今は理解しています。

◇ユウタの憂鬱

生徒たちは、中学校に入ると出身小学校以外の友達関係を結ぶことで、小学校時代の序列を組み替えようと、同じ出身生徒とトラブルを起こす、と経験的に私は考えていました。

ユウキは震災後の転入生です。色黒で、メガネをかけていて、いつもおどおどしていました。入学とともに新しい自分を伸ばそうとしていたはずです。でも、ちょっとの仕草を見咎められては、男子から苗字で「○○く～ん」と批判的に呼ばれることがありました。彼が一番下の生徒と思われるかのように。ユウキはいつも不機嫌で友達関係が作れません。「○○く～ん」と冷やかしてくる生徒がいることで彼の存在がみんなに意識されていました。しかし、彼の立場的な向上はありません。

幸いユウキは私の指導するソフトテニス部の部員でした。さらに、彼を常に冷かし、間違った正義感でユウキを指導するワッキーとヒカリもいました。

◇ユウタとその仲間たちの小さな成長を願って

6月に入ると、9月に行われる校外学習（山形方面）の取り組みが始まりました。1組担任の発案で、文化祭では「西遊記」を発表することにしました。三蔵法師一行が、金閣銀閣と勝負しながら、鴨水族館で館長から宝を戴くという設定にしよう。そのために、所々で演じながら撮影旅行をしよう、ということになりました。

キャストの決定と撮影、編集をKさんが一手に引き受けました。学年集会を開いて、構想を生徒に提案し、キャストを決めました。猪八戒のなり手が出てこないので、男子だけ集めて「やりたい人！」と私。生徒「……」。「じゃぁ、オレがやる」と手を挙げた私。するとノリで、「俺が」「おれが」とのコール。ユウキが手を挙げると、一斉に「どうぞ、どうぞ」。

ユウキに、いいの？　と聞くとすぐに了解しました。ワッキーが横から、先生、ユウキは学習発表会では演技が上手だったんですよ、と教えてくれました。

◇集団の中で生徒は育つ

「西遊記」のエンディングではダンスを取り入れ、ダンスリーダーがみんなをまとめました。

勝手な行動をとる生徒もいますが、そこも計算のうち。中心になる人が現れると、職員チームの後押しで何とか形になりました。

セリフはほとんどなかったのですが、ユウキも笑顔で演技しました。部活動の中では、ワッキーとユウキをペアにしました。ユウキのナイスプレーにワッキーは何度助けられたかわかりません。練習試合初勝利に二人で喜ぶ姿もみることができたときは、「初勝利だね」と褒めました。

Kさんと、あとは学力だね。勉強でも自信がつけばもっとトラブルはなくなる、と確認し合いました。Kさんは、校長先生の助言もあって小学校5年生からの計算練習に力を入れています。

◇最後に

新生徒会がスタートしました。小学校時代はけんかばかりしていました、というヒカリが学級委員に立候補しました。少しずつ、男子も成長しているように思います。

一日一歩、三日で三歩、三歩進んで二歩下がる、で指導を楽しんでいるこの頃です。

（中学校教師）

鈴木正気著『川口港から外港へ』を読む

かすが たつお

本年度第2回、使用テキストは78年に出版された茨城の教師・鈴木正気さんの『川口港から外港へ―小学校社会科教育の創造―』。

会の案内人は高橋誠さん（宮城歴史教育者協議会）。高橋さんは、学生時代のゼミで鈴木正気さんの授業参観に行ったということで、鈴木実践への思い入れが強く、実践の舞台になった日立市久慈の略図を書いて当時を一つひとつ思い出すように鈴木さんを紹介してくれた。

この会は年5回で3年目に入っているが、これまでは『山びこ学校』に始まって、すべて50年代に出版されたもので、70年代のものを取り上げたのは初めてになる。しかし、話を聞き、テキストを読んで内心驚いたのは、その実践の報告は50年代との違いを少しも感じないことだった。

授業を創る

話はちょっとそれるが、研究センターの書棚にある『川口港から外港へ』は、古書店から購入したものである。本の序文は、「私が現任校に赴任した1973年は、いわゆる『高度経済成長』が破たんし、生産力の増大が決定的に展望できなくなり、『低成長』と呼ばれる段階になりつつある時期であった。そして、経済危機はもちろん、政治、文化、道徳、教育全般にわたって危機的状況が進行していく時期であった。～」と始まる。この本の持ち主だった方の書き込みだと思うが、「危機的状況」に線を引き、「大げさな！」と書いてあった。この読み手と、著者鈴木の時代状況の把握の違いだろうが、この時期の捉え方の違いは教育界にあっても以後に重荷を背負うようになる理由の一つになったのではないかと「大げさな！」を目にして40年前を思い出した。

鈴木は「教科研社会科部会ひたちサークル」に所属し、50年代からいろいろな実践の報告をしており、自分の実践を、「60年代のそれは『自然地理』の実践であり、70年代に入ってからのそれは『地域に根ざす』実践と言ってもよい。この両者は一見断絶しているように見えるが、私自身は両者の連続性を自覚的にとらえようとしている」と言う。

この70年代の「地域に根ざす」社会科教育の一つひとつの仕事は、鈴木にある教育の危機的状況意識から出発した創造の実践であり、その報告がこの日のテキストであると言える。つまり、前述のように、「危機的状況」を「大げさな！」と思う教師（?）では、鈴木のような「地域に根ざす」社会科の授業は創られなかっただろうと思うから。

参加者で読む 1

案内人・高橋さんがみんなで読み合いたいと選んだのは、「第2章『久慈の漁業』（5年の実践）」と「第6章『久慈の漁業』その後」だった。

まず第2章「久慈の漁業」では、「久慈の漁業は進歩しているのか」「漁業が進歩しているのに漁業人口が減少しているのはなぜか」が中心的な課題になり集中討論が行われている。

最初の課題については、「久慈の漁業はおちぶれている」という菊池の主張を中心に展開。菊池は自分たちの調査をもとに、産業別人口を昭和30年と昭和45年を比較し、工業人口19、521から47、268への増加と、漁

業人口1、360から636への減少から、自己の主張を展開し、これに対して多くの反論が出される。

広木はこの時間について次のようなことを書いている。「ぼくらは言った。『漁業がおちぶれているのなら、なぜむかしの川口港から今の港に移ったんだ』。これはかなりきいたようだ。これに対する反論を取り上げてみると、『港周辺が浅くて大きい船が入れなくなったから』といったが、『それなら漁業がおちぶれているなら、大きい船は必要ない』と言った。予想としては、おそらく日立の工業の発達とともに久慈の漁業も発達しているのだと思う」と。

また、小泉は「漁業で働いている人が少なくなったのは、船が大型化してよい機械などをとりつけたので、人手がそんなにいらなくなったので、その人たちは工業に移ったために漁業で働くひとが減っていったのだろう」と推理し、それらが次の授業をつくり、授業の展開がそのまま提示される。

これらを通して、

「日本の産業を一般的に扱わなくても、久慈の漁業を深くとらえることがそのまま一般性をとらえることになる」

「この視点は、自分たちの親（地域）を教育する側の人として正面から見直さざるをえなくなり、親（地域）がもともと内部にもっている能力を顕在化させるなら、地域をとらえなおす一つの力になっていくと考える」

と鈴木は言う。

参加者で読む　2

第6章「『久慈の漁業』その後」の読みで、ことさらおもしろく、また考えさせられたのは、2節「座談会『久慈の漁業』その後」であった。

それは、5年生で「久慈の漁業」の授業に取り組んだ子どもたちが中学1年生になったとき、9人が集まり鈴木の司会で座談会をもった、その記録である。

座談会のきっかけは、出席者の数人が、夏休みの自由研究で「久慈の漁業」をさらに深めてみたいと鈴木に相談にきたことにあるようだ。

そのことについて、たとえば、宇佐美は「5年のときの漁業のことなんだけど、だんだん漁業がつぶれかかってきたというんですけど、いま考えて、現在と昔とくらべてどうなのか調べてみたいし……調査で見残したところを、広げて調べてみたい」と。小泉は「5年のときのレポート読んでみたら、『あれ、こんなこと考えてたのかな』なんて思ったり、変なこと考えたな、そのころ考えたのがあまかったというかな、そのときはそのときで割り切ったんだけど、いまとはやっぱりちがうなと思ったりして……」と言っている。

その座談会での発言について、話し合いにもなったものを2・3抜き出してみる。

・　教科書をやらないので今困るということはない。「久慈の漁業」の勉強をしていて、ひとつの資料からあることを考え、そこからまた考えていく。たとえば、漁獲高からいろいろなことが考えられていく。一つのことから一つのことを知るのではなく、一つのことから五つのことを知るという力がついてくる。

・　他の学校からきた人は、教科書にでていることなんか、要領よくつかむんですよ。だけど、今度教科書にない、自分の頭で考えることになると、いいことがでてこないんですよ。ぼくらは教科書に出てこないことがよくわかるんですよ。こういうこととこういうこととは、こういうつながりがあるなんてね。

・　漁具倉庫に行って聞いた時、おじさんがいろいろなことをやってくれたんだけど、いやがるというよりうれしそうで、こっちでこういうことを調べたいんだけどと言った時は、目がかがやいてくるというか、自分がやっていることをわかってもらえるというんで、そういうことが大きかった。おじさんたちは、ぼくらがやることについて、すごく喜んでくれているという感じで、すごく親切に教えてくれた。

『川口港から外港へ』は、今度の会のために初めて読み、現役のとき読まなかったことを私は大いに悔いた。子どもたちの書いたものや話の内容から、優れた授業者は子どもからもらうものもはかりきれないほど大きいのだと、あらためて思ったのだった。

センターの動き

〈10月〉

1日　10時から発送作業。福田講演ブックレット作成について打ち合わせ、データを渡す。3時、東北大の高橋さんと打ち合わせ。

2日　9時から高校入試に関する話し合い。

7日　午後、3人聞き取りに出る。1時半からヤスパース読書会。

8日　10時から入試問題世話人会、チラシ作りほぼ大詰めに。福田講演ブックレットの校正が入る。

10日　高校生の公開授業の1次チラシできる。

11日　事務局会議。臨床教育学会の報告。72号の意見感想、これまでになくいろいろ出る。冬の学習会についても決まる。

16日　台風のため、県内学校休校になる。午後しずまる。

17日　午前、朝市保育所に千葉さんと3人で写真を撮りにいく。錦町公園までの散歩について歩く。

18日　明日のフォーラムの参加者のことが気になる。ホームページの不具合がつづいていることもその理由のひとつだ。

19日　午前中、雑誌「教育」を読む会。午後、フォーラム「子どもと読書」。これからに向けての第1歩というところか。

21日　ブックレット校正をわたす。

22日　1時から、震災のつどい世話人会。

23日　10時から、入試検討の世話人会。英語教育についての講演、斎藤兆史さん（東大）に受けてもらう。

24日　中央公論の「英語の憂鬱」などを読む。今日の新聞に教育再生会議が、英語を小学校3年からにすると決めることなどいろいろなことが呆れるくらいとび出してくる。若い教師の学びの会。若い人、4人参加。

25日　事務局会議。英語教育についての会の持ち方を話し合う。テーマは斎藤さんと相談をすることに。通信73号について、清岡さんから提案。

26日　午後、教育のつどいのプレ企画、久冨さんの講演「どうなる、どうする　日本の教育」。

28日　ブックレット、宮教組の達郎さんに読んでもらう。

29日　午後の電車で、東北大の学生が学習支援をしている「亘理いちごっこ」に行く。沿岸部は他県ナンバーも多くダンプの列。防潮堤工事だ。

〈11月〉

1日　映画「ひろしま」を観る。英語のテーマ『グローバル化』の英語教育―日本ではなぜ混乱するのか」にする。

5日　10時から震災と学校の世話人会。

7日　高校生募集依頼の発送をつづける。

8日　事務局会議。今年のセンターのつどいの意見も出してもらう。若い教師のつどい月例会、若い人ゼロ。

9日・10日　「2013みやぎ教育のつどい」。

14日　小牛田農林から8人参加との連絡がある。

16日　「戦後教育実践書を読む会」。テキストは「幼い科学者」（小林実著）。案内人は鈴木吉雄さん。

18日　ブックレットはなんとかして多くの人に読んでほしい。頒布依頼のため名簿チェックを始める。

19日　通信別冊用に、田尻さくら高校の江草さんの教育のつどいに出されたレポートを使わせてもらうことで快諾を得る。

20日　ブックレットの依頼状をつくる。

28日　ブックレット到着、さあ、自分にとっては大きな仕事の始まりだ。ホームページの改訂のことで打ち合わせ。ブックレット、福田さんに発送。

〈12月〉

2日　「震災と教育」についての打ち合わせ。

3日　清岡さんの高校生参加の声がけを頼む電話かけが連日つづく。3時から理事会。

6日　授業参観に出かける。1時25分からの授業。村井さんの成長におどろく。授業を通して彼女がこれまで何を大事にしてきたかがよくわかる。

9日　弘済会に出す助成申請書作り。

10日　通信についての打ち合わせ。本誌は清岡さんがすべてを受け持っている。ブックレットの申し込みファクス第1号入る。2校目は17冊。大いに気分よし。

11日　午後、田中さんたち来室、日本臨床教育学会研究大会についての打ち合わせ。

13日　事務局会議

（春日）

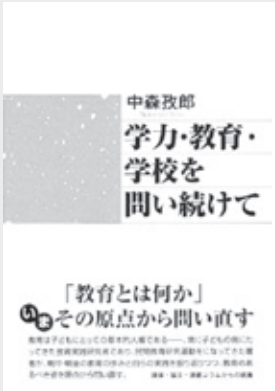
▼本の紹介▲

中森孜郎著『学力・教育・学校を問い続けて』

以前に出版した『学力・教育・学校を問い直す』は、しばらく前から手に入らない状態となっていた。本書は、改めてそこに集録されているものの一部を入れ替え、またその後行った講演記録や寄稿したものを加えて、新たに一冊にまとめたものである。この時期の出版に踏み切ったのは、第二次安倍政権のもとでの改憲の動向、またそれと連動した教育改革に対する著者の大きな危機感があるからに他ならない。

本書のタイトルは、旧著を引き継ぐ格好で『学力・教育・学校を問い続けて』としたが、あえて最後を「問い続けて」としたところに、著者のこれまでの一貫した生き方と教育学に対する真摯な変わらぬ姿勢が示されている。本書の章立ては「Ⅰ 私の教育論」「Ⅱ 温故知新―心に刻む先人のことば」「Ⅲ わが青春の軌跡」「Ⅳ 教育基本法政府改正案についての私見」となっている。章立てからも伺えるように、どの章にも主体としての著者が張りついている。また、つねに子どもから出発し、子どもへと還る実践と理論の往還関係がそこにはある。

教育をめぐる状況はますます厳しいものが予想される。それだからこそ、改めて「教育とは何か」を問い直し、問い続けたい。ぜひ、多くの方に読んでほしい。



定価　1600円＋税
発行　ウインかもがわ
＊問い合わせは「みやぎ教育文化研究センター」でも受けます。

発行：(一財)宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター　2013・12・27　発行責任者：春日辰夫
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45　フォレスト仙台5F
http://www.mkbkc.com　TEL 022-301-2403　FAX 022-290-4026